

三、山伏谷と貝原益軒

篠栗町の東端の、二瀬川から八木山峠に至る深い谷は、今も「山伏谷(やまぶしだん)」と呼ばれていますが、一七〇〇年頃(元禄期)貝原益軒が編纂した『筑前国統風土記』(以下『統風土記』と略)にも、この山伏谷のことがかかれています。

「……むかし山賊此所にて山伏を切殺し、其持たる物を奪取ぬ。しかるに彼山伏の靈魂崇をなし、行かふ人の目にも見えけるとかや。故に山伏谷と號す。……」

貝原益軒は八歳から十一歳(一六三八〜一六四一)まで父寛齋とともに八木山で過ごした事実があり、飯塚市八木山の知行所跡に「貝原益軒学習の碑」が建立されています。おそらく益軒は、父に従って福岡城下に行く為に、山伏谷を幾度か往復した事があったと思われませんが、鬱蒼とした樹林に覆われた谷沿いの道は、子供心に恐ろしい場所だったに違いありません。

せん。その時の強い印象が『統風土記』の山伏谷の記述に多くの紙面を割かせた理由ではないでしょうか。さて、それから約百年後、一八〇〇年頃(寛政期)に加藤一純によつて編纂された『筑前国統風土記附録』には「谷口に石碑あり。山伏の墓といふ。」と記されていて、この頃には山伏塚が築かれていたことがわかります。ところがさらに約五十年後、一八五〇年頃(幕末期)の『筑前国統風土記拾遺』(青柳種信編纂)には、山伏塚の位置と様子が、もっと詳しく記述されているのです。

この様に私達は、町内の歴史的な地物について、益軒の『統風土記』にはじまる優れた三つの地誌を、比較しながら読むことができるわけですが、これは非常に幸いであり、喜びであります。

「山伏塚」は現在、松ヶ瀬国道沿いの「五十六番松ヶ瀬地藏堂」に安置されている高さ一メートル位の石碑がそれだといわれていますが、車が間断なく行き交う喧騒の国道からは、昔日の言い伝えは想像もできません。